

## 特集

# 神山アーティスト・イン・レジデンス 2018

今年で20回目を迎えたKAIR2018は、過去に参加したアーティストを再度迎えるリターンアーティストプログラムも同時に実施し、11月4日をもって終了致しました。今回のGVJでは参加したアーティストに様々な質問を投げかけてみました。



カリン・ヴァン・デ・モーレン

Karin van der Molen

リターンアーティストプログラム  
KAIR2008参加アーティスト

サイトスペシフィックアート(展示制作する土地に応じた芸術作品)という表現に焦点を当て、大規模な立体作品やインスタレーションを世界各地で制作している。作品制作を行う土地に対して芸術的な応答を考案すべく、その地域を丁寧に調査し、現地の材料を用いて人々を自然の中へ誘い込む「入口」を作り出す。

## 特集 神山アーティスト・イン・レジデンス 2018

■神山に来て驚いたことは？

KAIR2008への参加が初来日で、毎日が驚きの連続でした。とてもフレンドリーに私たちを受け入れてくださり、また様々な面で制作に関わってくれたこと、言葉の壁という問題さえ感じなかったことに驚きました。当時は、神山をまるで第二の故郷のように感じるとは思ってもいませんでした。

■作品解説(インスピレーションなど)。

『神山金継ぎ』という作品を山の中に制作しました。重なりあつた五つの大きなお碗のベースに、割れた陶器の食器を張り巡らせていきました。何世紀にも渡り、四国の深い山々に存在する人間の営みや文化、四国八十八ヶ所巡礼者や旅人が残していった聖なるものに影響を受け、この作品は作られました。森の中に作られるこの作品の為に、住民の方々に家から食器を持ち寄っていただくことによって、制作に参加していただきました。集まった食器はモザイクのように張り巡らされ、まるでキノコかフジツボが自生するかのような姿となりました。一番下のお碗を苔で覆うことで、この作品は人と自然の交流や調和を尊重しあう象徴となりました。

■10年振りに神山に来て、どうでしたか？

来る前に「神山はすごく変化している」という話を聞いていたので、10年前に私たちが経験した素晴らしい神山がもうな

くなっていたらどうしよう、と不安でした。けれど、実際に10年振りに神山に来ると、若い人たちが多く移り住んでいたりと、新しいレストランやお店が生まれているという変化はあつたものの、フレンドリーでオープン、何にでも熱心で新しいものを受け入れる寛容さや、皆で協力し合うといった昔と同じ神山が残っていることを知れたのは、大きな喜びでした。

■KAIRプログラムはいかがでしたか？

KAIRは、生活・制作面の両方でもより良い滞在制作ができるようにとてもよく構成されています。アーティストがここの時間と場所を最大限に生かして新しいことにチャレンジができ、さまざまな交流を通じて地元の方々のサポートも得ながら、自信を持って新しいことを実現できる場であることが、KAIRの最大の魅力です。一つだけ望むとしたら、展覧会期間がもう少し長いと、より多くの方に作品を見ていただく機会ができるので良いなあと思います。

■最後に一言お願いします！

これまでKAIR活動が紡ぎ、そして実現してきた全てのことに感動しています。今後、より多くの若い世代の方たちがKAIRやGVの活動に参加していただくのなら、と思っています。今回、神山に作品と共に私の化身を置いていくので、また神山に戻って皆さんに会えることを楽しみにしています。





パット・ヴァン・ブーゴー  
Pat van Boeckel

リターンアーティストプログラム  
KAIR2008参加アーティスト

カメラマンとしてドキュメンタリー映像を専門に制作しながら、独自の方向性を持ってビデオアート作品を手掛ける。テーマは原住民から生態学まで多岐に渡り、哲学的に構成されたドキュメンタリー映像の多くは、オランダ公共放送番組にて放映されている。また、訪れた先々でビデオアート制作に取り組み、世界各地で発表を行っている。



特集 神山アーティスト・イン・レジデンス 2018

■神山に来て驚いたことは？  
前回の2008年からは想像もできないくらい新しい店が増えていて、若い人たちを神山で目にするようになったこと。でも、KAIRの精神はなくなることなく、10年前と同じように存在していました。

■作品解説（インスピレーションなど）  
映像インスタレーションをかつて眼鏡店だった場所で展示することで、展示期間の1週間だけ、その場所に生命を吹き込みました。かつてお店だったそのスペースを初めて目にしたときに、どんどんインスピレーションが生まれてきて、自分でも驚くぐらい早く（12日で！）作品が完成しました。

■作品づくりで苦労したことは？  
展示会場が決まった後、作品のイメージが次々に湧いてきて、興奮して眠れなかった（笑）。自分を落ち着かせるのに苦労しました。

■神山での暮らしはいかがでしたか？  
前回より滞在期間は短かったけれど、オーピングや食の交流、さよならパーティーと毎日が盛り沢山で楽しく過ごしました。帰国するとき、朝4時という早い時間にもかかわらず、集合場所にお別れを言いに人が集まってくれたのには驚きました。

■10年振りに神山に来て、どうでしたか？  
前回は、カリンのアシスタントとして神山に滞在しながら、自分の作品も作った

のですが、今回は神山に行くこと決めたときから、限られた滞在期間内に自分の作品に集中する予定でした。カリンの制作のサポートを色々な方がしてくれたおかげで、自分の作品づくりに集中できたことに感謝しています。

■KAIRプログラムはいかがでしたか？  
今回のような短い滞りで、作品を完成させるといったサポートや運営体制は素晴らしいと思います。悪かったところ？ 特にないなあ。あえて言うなら、もう少し展示会期間を伸ばせる方法を考えてくれたら。理由は色々あるんだと思うけれど、1週間は短い。気が付いたら終わってるからね。もっと多くの人に神山に来て、展示会を楽しんで欲しいです。

■KAIRの魅力は？  
KAIRはコミュニティとの強い繋がりがあることが、本当に大きな魅力だと思う。直接的な制作のサポートだけではなく、日々の暮らしの中で、町の人々がアーティストを温かく迎え入れ、気にかけてくれる。そんな環境は他のAIRではなかなか体験できません。今年で20年を迎えますが、この精神や環境がずっと続いているのは素晴らしいことだと思います。

■最後に一言お願いします！  
ありがとうございます！ 本当ありがとうございます！





イレーム・トゥオク  
Irem Tok



## 特集 神山アーティスト・イン・レジデンス 2018

マルマラ大学(トルコ)芸術学部絵画科を2007年に修了後、イタリア・ドイツ・フランス・韓国・トルコにてアーティスト・イン・レジデンスを経験。コンセプトに沿って、彫刻・絵画・アニメーション・陶芸など多様な技法を組み合わせることで表現の対話を引き出し、作品には細部にわたり精巧緻密に作り込まれた情景が広がる。

### ■KAIR応募動機は？

以前から日本の文化に興味があり、訪れたいと思っていたからです。

### ■神山に来て驚いたことは？

「こんな町は初めて!」と思うほど、人と人の繋がりに驚きました。外から見ると、普通の小さな町という印象を受けますが、よく近づいて見てみると人々の関係が織物の様に繋がっていて、力を貸し合って協力しながら暮らしていることに気がきました。それから、景色や自然がこんなに美しいなんて予想もしていませんでした。

### ■作品解説(インスピレーションなど)。

皆さんが見せてくれた全ての物から作品の着想を得ました。『小野さくら野舞台』と襖絵、木偶人形の表情、阿波和紙や江戸時代の幽霊画、日本文化や童話など神山で見えた全てが、作品づくりの構想へと繋がりました。また日課として、早朝に山や集落へ散策に出掛け、川の音や鳥のさえずり、虫の鳴き声を聴いて、色とりどりの自然を体感した経験は、要として作品に生きています。

### ■作品づくりで苦労したことは？

苦労はないです。他のどの場所よりも作品づくりに集中できました。皆さんが、常に私の為に最善策を考えてサポートしてくれたので、順調に制作を進められました。普段は、材料集めから時間をかけ

過ぎて制作前から労力を浪費してしまうこともあり。神山で得たサポートを参考に、もっと計画的に制作準備を行うべきだと学びました。

### ■神山での暮らしはいかがでしたか？

「ここにいれば安全なんだ」と心穏やかに暮らしました。安心できる場所があるというのは、生きていく上でとても重要です。この町で過ごした平穏な日々を忘れることはありません。

### ■KAIRプログラムはいかがでしたか？

とても満足しています。不満もありません。いやでも、作品展示含め滞在期間がもっと長かったら良かった! 半年でも滞在制作したいくらいです!

### ■KAIRの魅力は？

神山に来て、鮎喰川の青さに感動し、町並みや家造り、苔に覆われた石碑や灯笼を見て心打たれました。AIRというよりは、自然と歴史が結ばれた場所での休暇を過ごしているような、瞑想をする為に来たような、KAIRという贈り物を受け取った気持ちです。

### ■最後に一言お願いします!

会えなくなるなんて、寂しいです。こんなに素晴らしい町に住む皆さんは恵まれています。KAIRプログラムを是非、続けてください。特に、リターンアーティストプログラムに力を入れて欲しいな!





ラウラ・ルナ・カスティロ  
 ジョナサン・ターナー・ビショップ  
 Laura Luna Castillo  
 Jonathan Turner-Bishop

ラウラは、写真を学びながらビデオアートや映画制作への関心を深め、多角的視点からアプローチする工程を重ねることで、記憶の仕組みや想像力・物語性を探る。ジョナサンは、時計職人であり、時計仕掛けの装置や作品の修復も行う。時計学の技巧と新しいテクノロジーを結び合わせ、身近にある物や素材を再構築する作品を発表している。



特集 神山アーティスト・イン・レジデンス 2018

■ KAIR 応募動機は？

私たちの作品は、場所と関係性に重点を置いて制作するので、実際に生活をしながらどのような作品が生まれてくるのかということに期待し、応募しました。

■ 作品解説（インスピレーションなど）。

寄井座での展示を決めたとき、作品自体が劇場の中でパフォーマーとなるようなイメージで制作しようと思いました。作品は4幕から構成され、それぞれが異なった縮尺で表現されています。入口スペースは1幕目で、1・100。見えない旅人が地図を片手に彷徨っているようなイメージです。これは私たちの経験からきていて、最初は土地勘がないから地図を見ても全てが単なる目印にしか過ぎないけれど、慣れてくるとそこには個々の営みがあることを知り、そのひとつひとつには様々な記憶が刻まれているのです。それが2幕目の部分で1・10となつていきます。3幕目は現在で、これまで想像でしかなかったものが現実と結びついていくという意味で1・1となります。4幕目は、1・200で過去の遺産として取り残されたもの。私たちが神山で過ごした時間や私たちの目の前にあるものが、時間と共に過去のものとなっていくという時の流れを表現しています。

■ 神山での暮らしはいかがでしたか？  
 住民の方たちが温かく受け入れてくれ、この町で生活をしながら作品制作に取り組み

ました。そして、神山の自然もとても印象的です。ドライブをしていて迷ってしまったも、そこには見たこともない映画のワンシーンのような素敵な風景がありました。神山を離れて、この風景を見られなくなるのは本当に寂しいです。

■ KAIRの魅力は？

コミュニティとの繋がりが、他のプロジェクトとの大きな違いだと思います。関係性を築きながら、その中の一員として制作活動ができ、結果的にはそのプロセスがとても個人的なものとなりました。そのような環境の中で制作できたことが原動力となり、私たちのプロジェクトを發展させ、アーティストとして大きく成長できました。また、今回の滞在制作では、多くの新しいことにチャレンジする空間や時間を得られました。ここでの経験は身体的な旅や体験というだけではなく、とても個人的なもので、深く心の底に残ると思います。それは実際にその場所で生活をしながら制作をしないと体験できないことで、今後の私たちのキャリアの中で大きな影響を与えるでしょう。

■最後に一言お願いします！

招聘いただき、コミュニティの一員として温かく迎えてくださり、ありがとうございました。貴重な体験をさせてくれたこと、制作だけではなく神山での生活をサポートをしていただいたことに、心から感謝しています。





## 元教育長・大井敏之さんインタビュー

### 「地元の人の方が大事になってくる」

神山町教育委員会で教育長を務められていた大井敏之さんに、インタビューをさせていただきました。大井さんが教育長の時代に神山アーティスト・イン・レジデンス（K A I R）の活動が始まったこともあり、長くグリーンバレーを見守ってくださっている方です。大井さんご自身のお話からK A I Rがスタートした当初のこと、そして今後の神山町やグリーンバレーに期待することなど、幅広く聞かせていただきました。

#### 田舎にはない風が吹いた

大井さん（以下大井） 今は下分の箱石で住んでいます。生まれは、西光寺というお寺の上の方、南山という所です。小・中学校は下分。私が入学したときは下分上山国民学校という名前でした。高校からは市内で下宿をして、城南高校に通ってました。その当時は道も全然なかったけんな、バスで2時間くらいかかりましたよ。その後、城南高校を卒業して徳島大学に入学してな。学芸学部で今度いうところの教育学部に入った。

ー教員を志したのはいつ頃でしょう？

大井 まあまあ田舎では比較的勉強ができたわけよ（笑）。そしたら、いろんな人

が教員をすすめてくるんよな。それとあの当時は師範学校の制度も残って、学校行くんにもお金がいらんかった。そうになったら、うちは貧乏やったし選択の余地やなかったんよなあ。まあ学力や家の資力がうまいこと合ったけんな。あんまりごっつい理想はありませんでした（笑）。最初に赴任したんは、三好市山城町の河内小学校。結構遠い所に行ったんよ。それから小中学校をいろいろまわった後に県の教育委員会に行って、神山には広野小学校の校長という立場で帰ってきました。それで、そのときの高橋町長が「2年で校長辞めて、神山町の教育長になってくれんぞ？」って言ってきて。それも断れんでえなあ（笑）。その後、教育長を7年やらせてもらいました。期間は平成8年から15年まで。私の任期の途中で下分小学校は休校になったんやけど、ちょうどそのときは全国的にも休校・廃校が多かった時代よなあ。上分小学校も私が教育長になる1年前に休校になったし。ほなけん、私やば休校の為の教育長だった感じですよ（笑）。

ーグリーンバレーとの関わりはそのときから？

大井 その当時は、グリーンバレーの前身の国際交流協会で、私が教育長になる



前からALITの先生の民泊受け入れとかをしようとした。それからK A I Rが始まったけど、そのときはやっぱりすごいなあと思っただけ。これだけのことができるんは、町としてもありがたいでえなあ。

ーありがたい。

大井 神山に新しい風を入れてくれるわけですよ。外国の人が町に来てくれることによって、田舎にはない新鮮な風が吹いたと思う。K A I Rが始まった当初は、私も教育長の立場で違う町へ視察に行かせてもらったんですよ。ただ、その町は町長さんが予算を沢山つけて事業を進めとったんやけど、やっぱり町長や担当者が替わったら事業の規模が小さくなってしまった。その点、神山は違うでえなあ。グリーンバレーの皆さんは、民間やけど信念を持ってやってくれるけん続きよる。芸術家の人が来てても、すごい大事にしよるもんなあ。何から何までサポート体制がすごいでえ。宿舍の掃除から足りん物の調達まで、至れり尽くせりでえなあ(笑)。それはすごいことよ。

ー教員宿舍をアーティストも使えるようにした経緯を教えてください。

大井 私が教育長のときに、グリーンバレー

前理事長の大南さんが教育委員だったけん「教員宿舍を使えんかいな？」っていう話をしようちゅうしよったんよな。ただ、教員宿舍の使い方っていうのも一応条例に入ってたけん、議会にはかけなあかんかった。まあそれを変えただけのことやけん、そんなに難しいことはなかったんです(笑)。どうせ使い道がないんやったら有効に利用した方が良く、そのときから綺麗に使ってくれよるけん、そりゃ文句はなかったわだ。



### サポーターの幅が広がれば良い

ーイン神山の神山写真帖へ投稿されたきっかけは？

大井 ちょうど『神山町史』ができてな、色々神山の資料を見る機会があったんですよ。そしたら、下分やでも景色がどんどん変わっていきよるんよな。ほなけん、今の町の姿をいつちよ残しとこうと思っって写真を撮り始めたんよな。下分の人家は全部撮るとよ。あっち行きこっち行きしてな(笑)。ほういう撮影をちようどしよったらイン神山ができたけん、せつかく撮ったもんを皆に見てもらえたらと思っって投稿し始めたんよ。私もしばらくの間、楽しませてもらった。身近にああいったメディアがあるんは良かったわなあ。せつかく写した写真を人にも見てもらえるし、自分でも後から見返すことができる。同窓会に行ったときに、イン神山の宣伝をしたりもしたよ(笑)。

ー最後に、今後の神山町やグリーンバレーに期待することはなんでしょうか？

大井 こうやって町が変わってきよるんは良いことやけん、ずっと継続できるようにせなあかんよな。もしこの勢いがなくなっ

てしまうと、もう一回盛り上げるんは難しいですよ。今は上り調子でいきよるけども、冷めだしたら移住者も帰るでえなあ。ほかが問題やな。あと、神山町出身者があんまり関わりを持ってないんは見よって悲しい。勿論、全くおらんわけではないんやけど、もっと増えてきたら良いのになあ。グリーンバレーもサポーターの幅が広がって、地元民が関わりやすいようになっていって欲しい。これからは地元の人のが、もっともっと大事になつてくるはずやけん。神山そのものに力をつけて、移住者と地元の人が関わり合っって、さらに発展していってらと思ひます。



### 特別インタビュー

### 元教育長・大井敏之さん